

なぜパターン認識だけで腎病理は読めないのか？

長田道夫，門川俊明(著)

東京腎臓研究所・所長

山中宣昭

対話形式によるユニークな腎病理入門書

本書は、腎臓病理を専門とする長田道夫筑波大学教授と臨床腎臓内科医である門川俊明慶大教授の対話形式によるユニークな腎病理入門書で、対話形式であるため、非常に読みやすく、親しみやすいものとなっている。これは実際の対談を録音して記録したものではなく、腎生検病理を学ぼうとする門川先生が、臨床医の立場からのさまざまな疑問や質問を問題提起という形で長田先生に投げ掛け、これに対して長田先生が応答するというプロセスを、インターネットによる相互通信手段によってやり取りし、最終的にこれをまとめて対談の形に編纂したものである。このため、その場限りの問答という限定された制約に縛られることなく、互いに熟考の上でのやり取りを反映した濃密な内容となっている。

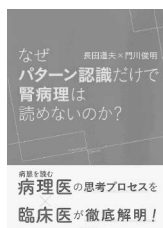
この本の最大の特色は、病理医である長田教授が、自らの腎病理組織診断に際しての思考過程を分析し、そのプロセスを系統だて、まとめて示したところにある。内容に即した組織画像が豊富に示されており、画像のクオリティも良好で、理解を助けている。手だれの病理医の通弊として、ところにより独特な見解による危うさなきにしもあらずだが、随所に多くの示唆に富む指摘がある。

第1章の「アトラスだけでは病理診断はできない」という序論に続き、第2章はこれまでに確立されている8つの組織パターンを解説し、そのパターンがどのように成立するのかという病変形成機序考察の重要性を指摘している。第3章では、この基本的パターンに基づいて病型を認識し、病型からさらに病態の把握に至る6つのステップを解説。主病変と副病変を見分けること、病態の把握には常に時間軸の関与を意識すること、病理診断には臨床情報との対応が不可欠であること、が強調されている。診断の本質は病因の解明にあり

として、第4章は病因診断のために蛍光抗体法と電顕による情報が極めて有用であることが述べられている。蛍光抗体法からは、病態に大きくかわる免疫情報の把握により病因を示唆する大きな手掛かりが得られ、電顕検索からは、精細な超微形態情報を得ることができ、電顕なしでは診断不能の疾患もあり、病態の的確な把握と病因の解明に対する電顕の重要性が論じられている。第5章は代表的9疾患を取り上げ、病態を理解する読み方を具体的に例示し、日常的な代表的疾患の病態の理解は、全ての病理組織像の読みの理解にもつながることを示唆している。最終章はこれまでの解説に基づいて実際の病理診断を試みる診断演習とし、最後に全体のまとめを演習形式で示した非常に巧みな構成となっている。

本書は腎病理組織病変を読み解くための優れたガイドブックであるが、思考過程に基づく系統的分析なので、拾い読みではなく最初から終わりまで記述の流れに沿って読み通すべきものであり、このような論理の展開は、今後の発展が予想される人工知能による病理組織診断のためにも、貴重な基礎資料となることが期待される。

思考過程のパターンは人により異なっているもので、必ずしもこのとおりに診断を進める必要はないが、腎病理を専門としない一般病理診断医にとっても非常に参考となる内容である。



●B5/頁 200/2017 年
定価：本体 4,500 円＋税
[ISBN978-4-260-03169-1]
医学書院 刊